

風見鶏人生だって、よくないですか？

みなさま、初めまして。私はとある小学生向けの教材を発行している出版社に勤務しています。小学生の頃から社会が好きで、高校生の頃には社会系の科目（特に歴史）でしか点数がとれなくなっていました。そのような有様ですから、大学で勉強するなら歴史しかないと思い、将来のことなんてまったく考えず、進学先を史学科にしました。大学では「好きな歴史をたくさん勉強して過ごしました。」などと言えるはずもなく、部活（体育会です）だけをして時間が過ぎ去っていきました。4年生になり、まわりの仲間が就職活動をしていくなかで、疑問を感じるようになりました。それは、「自分は大学生になっていったい何を学んだのだろうか。」ということでした。そこで大学院に進学することにしました。大学院生になると、先輩の知識量に驚かされ、もっと勉強しなければと焦り、日々知識を得ようと奮闘していたような気がします。大学院に進学すれば、何かしら専門職に就けるのではという甘い考えもありました。当時、学芸員にでもなれば良いかと思っておりましたが、学芸員は狭き門で、私の知識量ではなれるはずもなく、それならばと教員免許を取得することにしました。決意したのが大学院の2年生のときですので、1年では取得することができません。2年かけて中学・高校の教員免許を取得し、計3年で修士課程を卒業しました。さて困ったことに、就職は決まっていません。教員採用試験は受けましたが、専門の勉強をしているわけでもないため、当然結果は不合格。翌年は非常勤の講師か塾の先生でもしながら、専門分野の勉強でもできたらいいなと考えていました。そのようなときに、就職先がないのであれば、教育関係の出版社で働かないかと声をかけていただきました。

そのような不思議な縁もあり、現職の出版社に就職することができました。専門は歴史ということで、社会科に配属されました。当初は専門知識を生かせると考えておりましたが、実際に業務にたずさわってみると、専門知識よりも、小学生にとって、いかにわかりやすく説明するかということが重要だと知り、愕然としました。文字数の制限があるなかで、誰にとっても、簡単で、わかりやすい文章が求められたのです。それからは、小学生にとってわかりやすくなることを第一に考え、編集作業に取り組みました。（とはいえ、専門知識が不必要というわけではありません。知識があるからこそこの程度でよいかという判断もできます。）私が勤務する出版社は、小学生向けのテストやドリルを発行しています。私が作成したテストを全国の小学生が実施し、成績がつけられています。そのため、間違いは許されず、責任は非常に重いです。編集部の電話が鳴り、見知らぬ番号が表示されると、何か間違いや不備の指摘の電話ではないかと、ヒヤヒヤしました（それは今でも変わりませんが…）。そのような重圧と戦いながら、よりよいテストを作成しようと、日々奮闘していました。

そのような日々を過ごしていると、気づけば10年以上経過していました。すると突然、思いもよらぬことが起きました。それは社内事情により、社会科ではなく理科をやっほしいというオファーでした。編集者として10年やっていれば、それなりのことがわかるようになります。小学生向けの社会科の教材を作成するための知識はそれなりに習得でき、これからはもう少し要領よくやり、楽ができるようになるかと思った矢先のことです。大学・大学院で学んだ専門知識も生かされることもない、未知の世界に放り出された気分で

したが、会社の命令であるため、やらざるを得ないものでしたので、理科への異動を受け入れました。

それからは理科の勉強です。理科の教材作成といっても全くゼロから作成するものではなく、今までの諸先輩方の実績があるため、過去のテストを参考にしつつ、何とか編集作業を行うことができました。幸いなことに、相談できる理科の先生方もたくさんいました。何より理科を勉強し直すことがとても楽しかったのです。あまり知識のない理科だからこそ、どのような問題がよいのか、レイアウトはどうしようか、小学生にこの問題はわかるのだろうか、など、自分自身がテストをやっている感覚で教材作成に取り組むことができたように思います。結果として、理科の教材づくりを経験できたことは、自分にとって、とてもプラスになったと思っています。

あらためて振り返ってみると、自分でこれをやるんだといった強い意志をもって行ったものは何もないことに気づきました。まさに風見鶏人生です。ですが、私は後悔していません。自分から進んで教材作成の業界に入ったわけではありませんが、そのなかでやりがいと目標を見つけることができました。それは、「よりよい教材を作成し、学校現場に提供すること」はもちろんですが、「このテストはあの出版社のあの人がつくったものだと、業界の人にわかってもらえるようにすること」です。狭い業界ですので、業界の有名人にはなれます。また、違う教科に挑戦して、小学校の教材作成のスペシャリストになり、独立して、原稿執筆だけで生活できればなんて考えもします。

私たちが社会に出てからの10年と、みなさんがこれから社会に出る10年では、社会を取り巻く状況、スピード感がまったく違っているので、私の半生など、何の参考にもならないかもしれません。私たちの頃も少子高齢化が問題となっていました。その問題はより深刻となり、人口減少時代に突入しました。AIによって、今後10年で消える職業と消えない職業が言われるようになりました。消えない職業として、教員があげられています。消えない職業の条件としては、人間の感情、創造性、教育が関係しているものだと思います。それだけに、教育の重要度は増すばかりです。教材の編集者は生き残ることはできるでしょうか。生き残れる保障はありませんが、教材の編集に興味がありましたら、ご連絡ください。一緒に先生方を支えていきましょう。

みなさんのなかには、教員になる人、一般企業に就職する人、希望通りに就職できた人、希望通りに就職できなかった人など、色々な人が出てくると思います。どの道を選んだとしても、新しい道が待っています。その道は険しく、厳しいものかもしれません。しかし、頑張っていれば、必ず道は拓けてきて、新しい目標を見つけることができるはずです。すぐに見つからなかったっていいじゃないですか。私のような風見鶏人生でも、やりがいを見つけることができました。大学で学んだことを生かせる人は一握りかもしれません。ですが、大学で学んだことや、経験は決してムダにはなりません。大学生の4年間で自分にあった進路を見つけることは大変なことだと思います。自分に向いていないと思ったら、立ち止まっても、引き返しても、いいじゃないですか。途中で違う道に進んだとしても、違うゴールが待っているだけで、色々な道が拓けます。新しい未来への第一歩、応援しています。